

法隆寺大鏡



第十六集

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



法隆寺大鏡第十六集挿圖解説

第一、第四、五重塔四面具

第一 東面維摩詰像土

第二 西面分舍利佛土

第三 南面彌勒佛像土

第四 北面涅槃像土

天平十二年二月の本寺資財帳に

合塔本肆面具區一具涅槃像土 一具分舍利佛土

右和銅四年歲次辛亥寺造者

とあるは即是なり、塔の密柱を圍みて四面に山岳洞窟を構へ、幾多の佛菩薩諸天尊屬を配す、皆塑土もて造り、或は金箔を押し、或は彩色を塗る、我國群衆彫刻の最も多數にして面かも完成せるものなり、當初の面目は年所を経るの久しき壊破に繼ぐに修補を以てせられ、鎌倉時代と江戸時代に於ては、特に大修補の加へられたるを見る、其善く當初の面目を保持する者は、既に採つて以て前集に收めたるもの多く、尙號を逐ふて其足らざるを補ふべし、其の製作の法傑出せる技巧に至りては、又既に前集に盡せるを以て、今更に贅せず。

第五、第十、西圓堂 木彫着色十二神將像

丈二尺五寸乃至二尺七寸

西圓堂の本尊樂師如來は奈良朝藝術の粹を蒐めたるものにして、夙

に許の樂師として知らる、之に隨從すべき十二神將の存在せしか如何、今之を徵すべき資料を有せず、收むる所の圖は鎌倉時代末葉の製作に係り、本寺の法運再び開けて、諸事緒に就ける時、隨從眷屬なきを遺憾として、新に勸進せられたるならむ、鎌倉時代の彫刻は如來部よりも寧ろ忿怒部に特長を有し、四天王神將の類始めて威怒の相を熾にするを得たり、この手法の自由は即ち諸處に其勸進を促かせる所以にして、本像の如き其代表的作品と稱すべからざるも、亦當時の注目すべき木彫たるを失はず、十二神將像は鎌倉時代に入りてより、各其頭上に動物を安んじて十二支を標示することとなり、後世遂に其制を改めず。

第十一、第十六、網封藏 絹本着色五尊像

縦三尺四寸六分
横二尺八寸一分

五尊像の名既に奇なり、金界大日如來を中心としながら如意輪觀音と虚空藏菩薩を上方に配するは更に奇なり、密教渡來の祖師たる弘法大師と、本寺の開祖とも稱すべき上宮太子とを相並べて下方に配するに至つては、實に奇中の奇と云ふべし、本寺は其名の學問寺と稱する如く、専念宗教をとらずして、教義を吸收するに務めたるは、固より其處なれども、鎌倉時代に至りて眞言宗の復興、殊に南都に於て西大寺一派の眞言律宗の影響は、最も深き感化を與へたるが如し、西大寺の寂尊が獨り教義を鼓吹したるのみならず、親しく法隆寺に往來して其維持保存に努めたりしは、前集既に説ける網封藏の如意輪像を見ても明かに、其無言の裡に宗義の具有ありしや疑ふべ

からず、獨り寂尊の成化ならずとするも、此時よりして密教精神の法隆寺に注入せられし事、素より否むべくもなし、其微證とすべきは此五尊像を推すより明らかなるはなかるべし、智勢印の大日如來は云はても知るく密教の本尊にして、如意輪尊虚空藏尊は多少本寺の原始教義に關係ありとは云へ、直に大日如來の脇侍となるべくもあらず、弘法大師を配するに至つては、これ即ち他宗の祖師を拉し來れるもの、殆ど本寺と何等の因縁を譯ぬべくもあらず、之に對して上宮太子を配せるに至ては、強て自家の面目を發揮せんと努めたるに外なく、殆ど其云爲する所を知らざるなり、前に足利初世の作と銘記せられたる不動尊及弘法大師像の、同寺境内護摩堂に存するを擧げて、眞言宗の影響既に根底に浸漸せしを説けるが、今や此五尊像を見るに及びて、向より早く其勢力の顯著なりしを證するに至れり、其描線の整備して筆力に沉着の意を寓する深く、線を主として形相の本義を捉へんとする時代主義の飽くまで融和せるは、固はずして鎌倉季世の畫なるを知るに足る、唯其形相の按排より前代の描法より推して致ふれば、同じ鎌倉時代の作と云ひながら、其間に古代の餘香の存するを認めざるを得ず、法隆寺は千古の名刹なり、時と共に旋轉推移するものありとは云ひながら、何處か古香の懐つかしむべきあるを免れず、此圖の如き全く新様を汲みながらまた古様の存するは、則ち又其描法にも新古の相交はる所以なり、太子と觀世音との因縁は古く著録せられ、大江匡房の偶讀明らかに之を證し、太子と弘法大師との因縁は、後人の偽作とは云へ鎌倉時代に於て、既に河内なる太子廟内の碑文に於て、之れありしを窺ふを得べ

し、太子は千古の偉人なり、大師は千古の傑物なり、時を同うせば相提掣して佛法興隆の大師たりしや疑ふべくもなく、時を同うせざるも後世之を一にして厭離穢土の曼荼羅とするも、亦當に然るべき所ならむ、此圖野山に出現せず、醍醐東寺に行はれずして、獨り本寺に之を見るは、密教浸漸の勢力を證する所以なりと雖も、本寺の他に異なる特色また此處に存す、かくて法隆學問寺の面目は、世を異にし時を移すも依然として保持せられ、佛教史上に將た藝術史上に、連綿として資料を供給して盡きざるの成あり、現在の積裝は寶永七年に成れりと見え、背に五尊像及大藏院奉修者也、干時寶永七年甲寅十一月日、地藏院權少僧都覺賢、表具師京 吾孫子龍尊像と書せり。

第十七、御物 金銅舍利塔 總高三尺二寸五分

古今日錄抄舍利殿の條に次舍利安置塔一基金銅也多寶也とあるは、即ち今御所の藏たる此塔にして、形より云へば多寶塔、用よりすれば舍利塔なり、臺基は木製漆塗、裏面に保延四年八月云々の銘あり、此様式としては現存品中第一の古制に屬し、相近きものとしては西大寺の寂尊が經始せる鐵塔を存するのみ、寂尊親しく法隆寺に詣て、其如意輪觀音像を修補するなど、契縁の甚だ深かりしを思へば、同寺の鐵塔も亦範を此塔に仰げるにあらざるか

第十八、御物 漢竹尺八 長一尺四寸六分五厘

同 壑尾 長一尺八寸三分五厘

同 如意 長二尺一寸七分

古今目録抄に云ふ大尺八漢竹也太子此笛自法隆寺天王寺へ御之道推坂ニシテ種莫者樂吹給之時、山神御笛ニ目出御後ニシテ舞ケリ、太子奇見返愛山給奉見、怖指出舌、其様舞傳天王寺舞之、今云種莫者也、と天平勝寶八歳の東大寺獻物帳には玉尺八一管、尺八一管、樺尺八一管、刻形尺八一管と見ゆ、其他西大寺資財帳源氏物語等皆其名を録するを觀れば、夙に吹奏愛敬せられたるを知るべく、就中其最古の遺品としては、御府の藏を推さざるを得ざる也、其長は曲尺の一尺四寸有餘にして、即ち唐代の小尺一尺八寸に相當す、所謂長笛よりは短きを以て短笛とも稱せられ、又尺八の稱ある所以なり、噓尾は支那六朝時代より盛行はれたる道具にして、講經の編素皆之を繞つて以て其容儀を修飾し、一座を應ずるの用に充てたり、六朝佛教の影響やがて我國に及ぶや、噓尾も亦た從ふて傳來さるゝに至れり、太子傳屏に十四年秋七月の條に天皇太子に詔して勝鬘經の講説を求められし時、太子辭奏して曰く、臣此頃其の疏を製せんと欲し、義理を思へども未だ通達すること能はず、伏念五六日至旬時乃ち應さに噓尾を握りて師子座に登るべしと、以て其用を見るに足るべし、天平寶字五年十月に註記せる法隆寺東院資財帳に

合噓尾貳枚

壹枚漆匣 表裏竹形 楯楯井楯一合
表裏竹形 裏丹楯

右土宮聖德法皇御持物者

とある噓尾は即ち天平十九年の大安寺緣起流記資財帳には合噓尾三

枚と記し、貞觀十五年の秦公寺資財帳には噓尾一枚と記せると同じく、皆同種異名にて、當時廣く佛寺の用具たりしを證すべし、さてこの東院資財帳に見えて土宮太子の御持物と稱せられたるものを、顯眞の古今目録抄に徴すれば

大噓尾二枚、一者日本様挿白猪毛、今消无之、一者唐土様、葉象牙、杖銀、葉象牙、中略今此噓尾を撰有勝鬘經講説之説云々

とある日本様の者は、即ち前に挙げたる壹枚漆匣の噓尾にして、明治の初年同寺より御府の有として獻納せる此噓尾たりしは、實に吾人の最も珍とする所なり、此古記を以て現品に證すれば、葉象牙形と云へる如く、把手の部分は圓によりて明らかになれり、堅重なる唐木を利用して、巧に吳竹形を彫刻し、上に漆を塗れるなり、白猪毛の存在は目録抄既に消盡すと云へる如く、今一毫だも見ることは能はざれど、團扇形に挿されたりしや疑ふべからず、實物と古記と果して照合すること斯くの如くんば、これ實に土宮太子の手にし給へるものにして、勝鬘經講説の席にも親しく之を執らせ給へること明らか、千古化現の聖者、自ら目前に彷彿たるにあらざるや、正倉院中にも尙三種の噓あり、相並びて六朝の古制を傳へ、支那龍門山なる維摩詰像のもの其類を同うす、如意唐木を以て造る、其制正倉院に存する如き精巧の者にあらずと雖も、また最も善く古様を傳へたる者の一なり

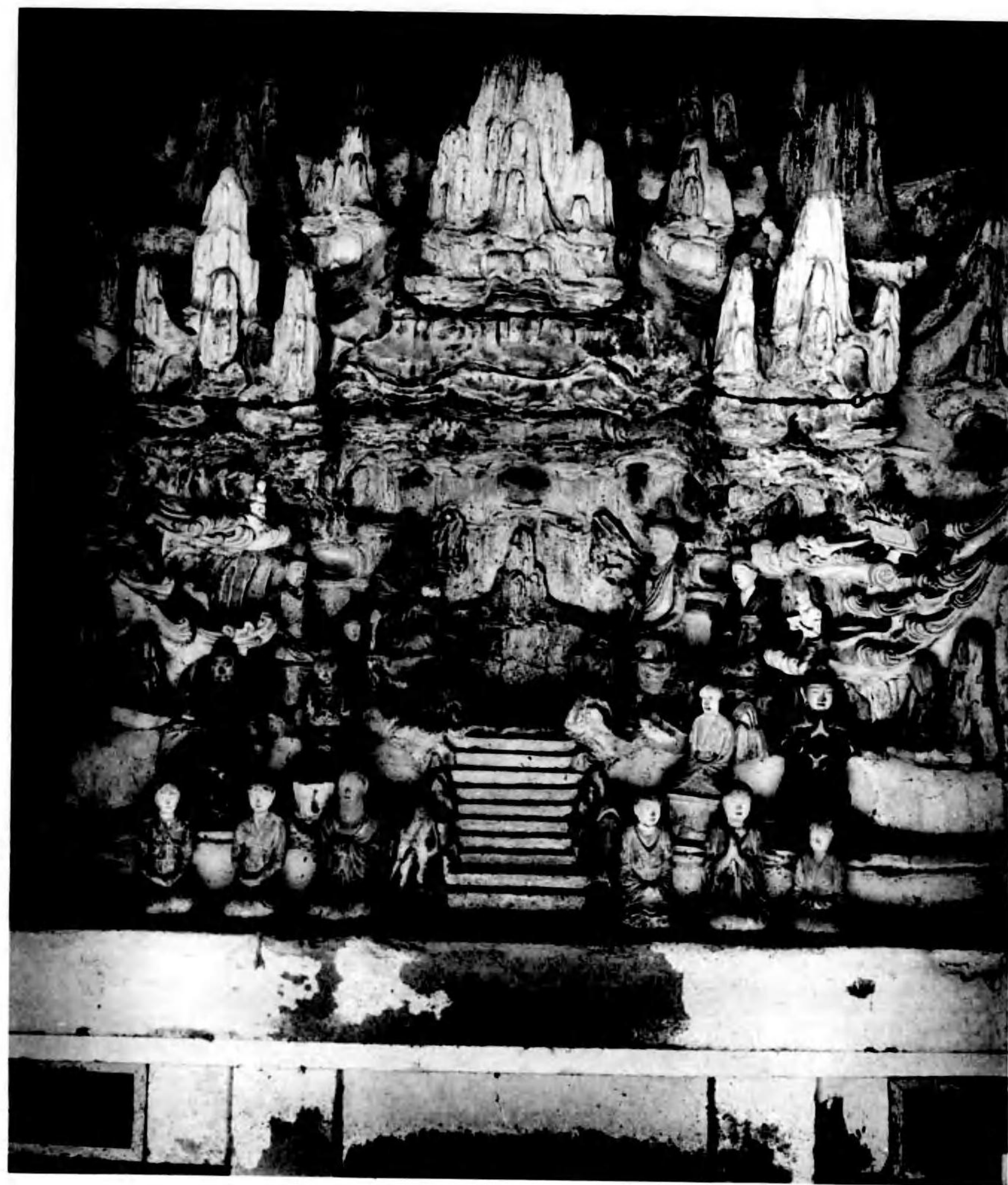
第十九 御物 香木 小長二尺一寸八分 徑約三寸

古來珍饈の名香木たりしは、代々其斤量を衡りて書付たるにて知ら

る、大の分には更定廿四斤、天應二年二月三日、更定廿四、延暦二十年定廿五斤、小の分にも更定重十二斤八兩、寶字五年三月四日、天應口年定口、白檀延暦廿年定十三斤等の文字散見す、其材質は白檀と記せる如く、白旃檀即ち沉香なり、其意義よりしてか古傳に土佐の南海に漂着せるを、推古天皇の御宇、採つて以て本尊を刻し、餘れるを傳へて今に至れるなりと云ふ、檀造佛の貴重せられしは九面觀音像に就いて述べたる如く、其これ無きを保し難けれども、殘餘の材としては遽に首肯すべからず、圖中悉曇文字に似たる刻文の存するは、いまだ的確の證を得ざれども、シリア文字なりとの説あり、果して然らば其舶載の歴史に就いても興味ある問題の藏せらるること疑を容れざるなり。

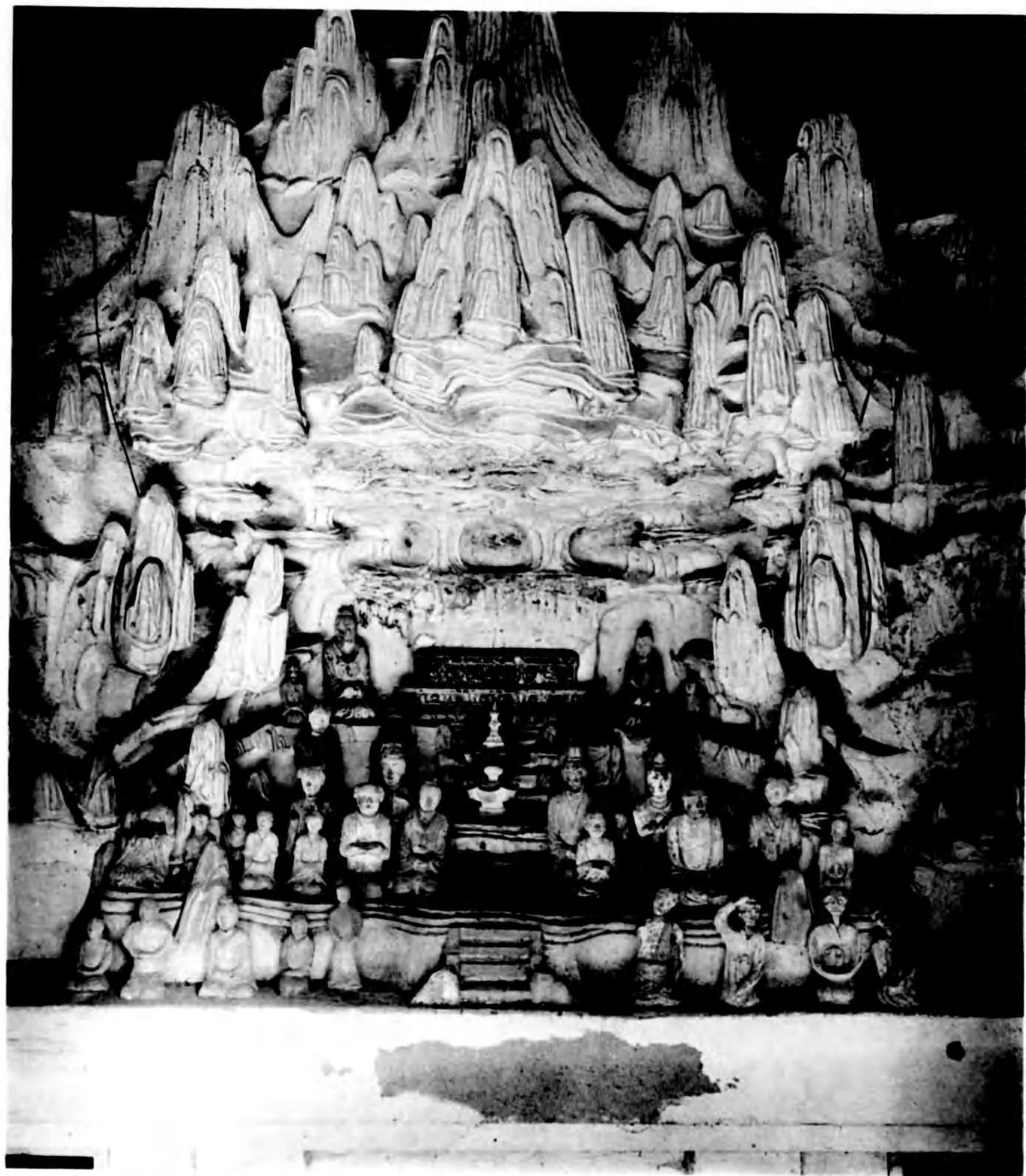
第二十、金堂 玉蟲厨子密陀僧文様

前集に接続して、厨子の彩色文様を示す。



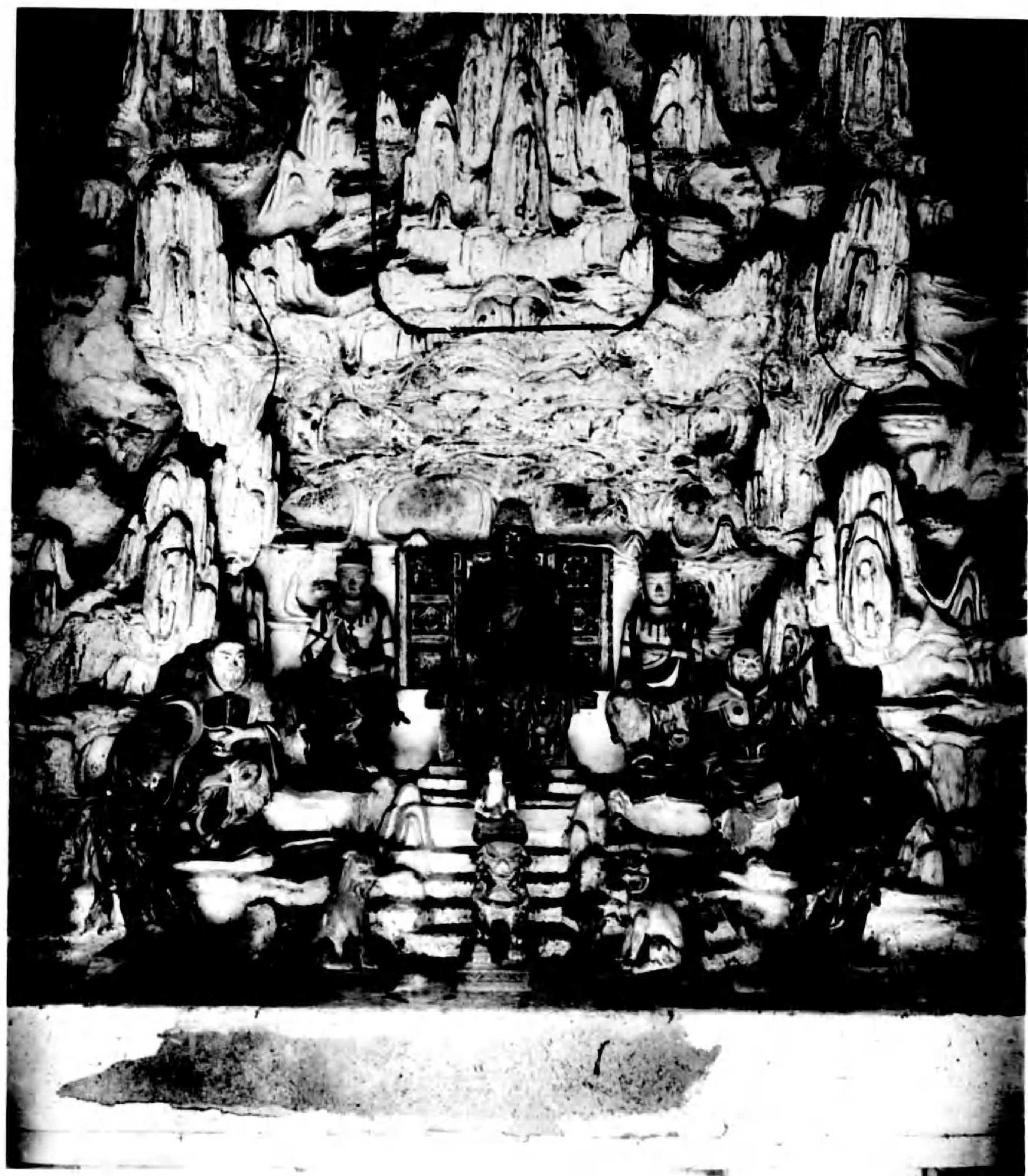
五層塔摩訶像上

五層塔摩訶像上



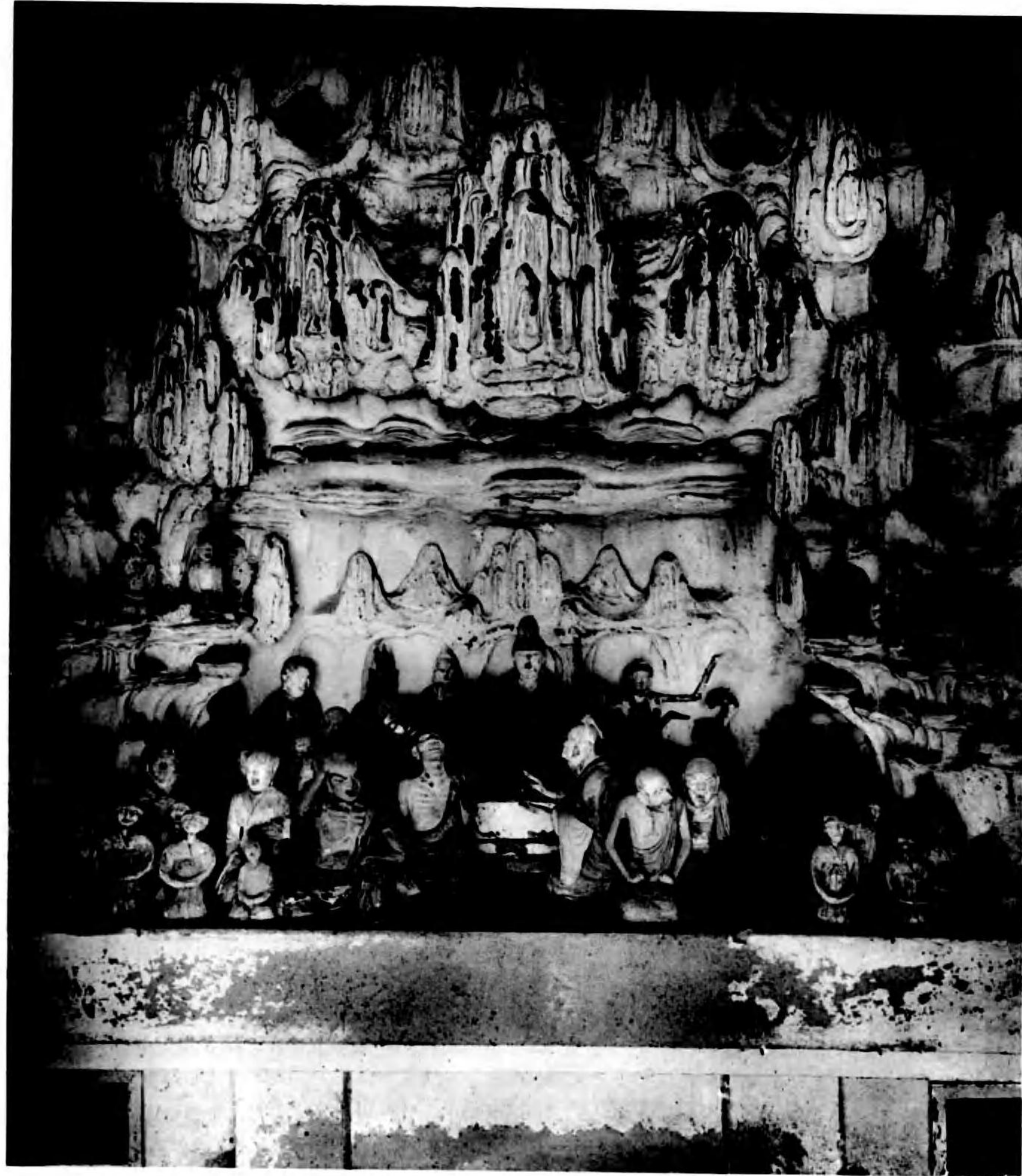
五重塔舍利佛

五重塔舍利佛



五重塔新佛像

五重塔新佛像



五重塔窟壁畫



西園寺

(三) 將神二十師榮色五彫木 堂園西



西園堂
木彫
着色
二十
二神
將

(二) 西園堂木彫着色二十神將



西園寺

(三) 將神二十師樂色若彫木 空圓西



西園堂

(四) 將神二十師榮色者彫木 堂園西



西園寺

(五) 將神二十師榮色着彫木 堂園西



西園寺

西園寺 木彫彩色師二十神將



藏日明
五色香木
像尊

一、像尊五色香木樹 藏日明



石上五色像

石上五色像



鳥類

(一) 像尊五色若木前 藏日朝



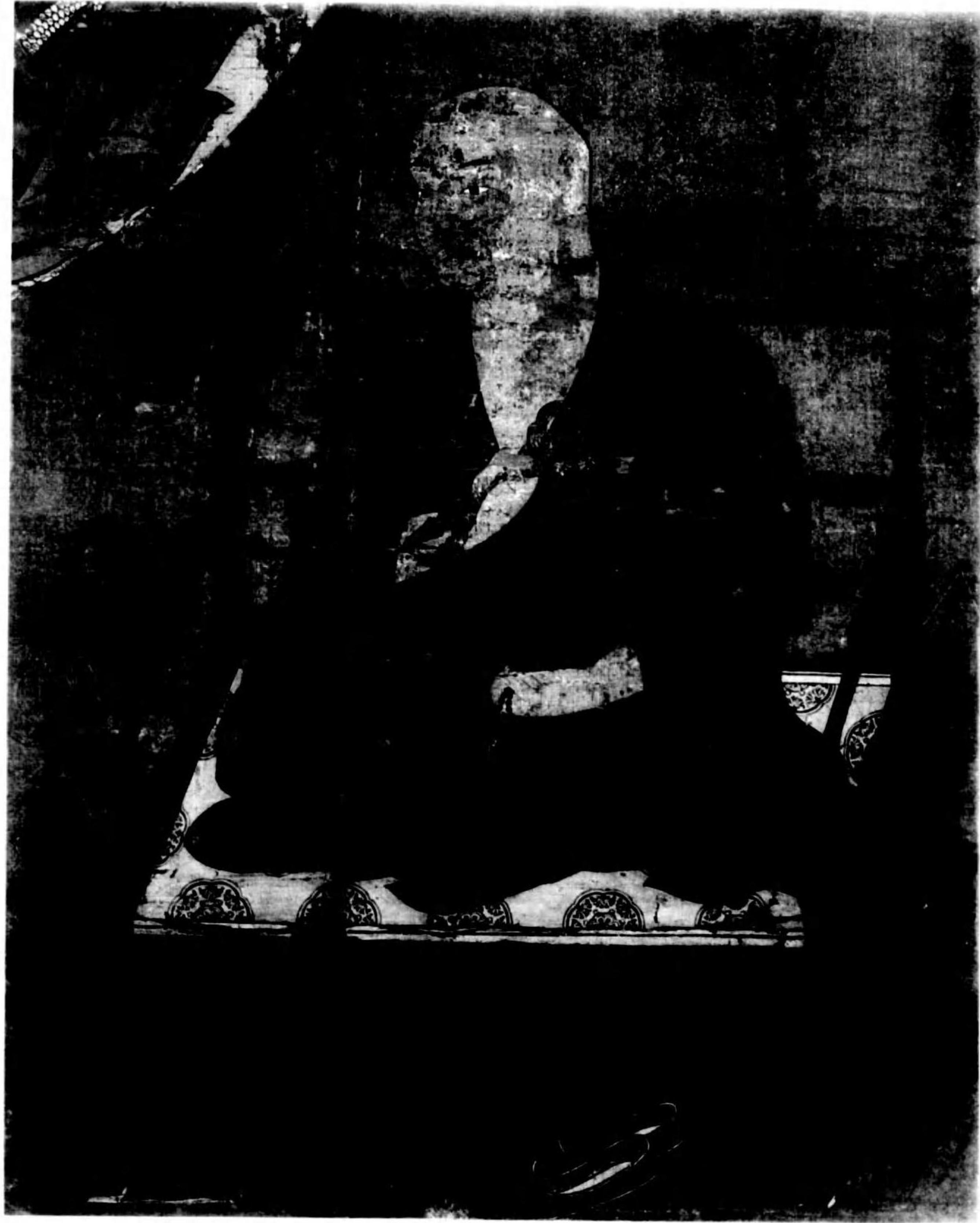
五色石本相 飛月網

四四 像曾五色石本相 飛月網



洞窟

洞窟 像尊五色石木樹 藏封洞



志蓮堂藏

1140 像尊五色若木拈 歲月編



塔利舍銅金 物即

塔利舍銅金 物即



点如同



尾座同

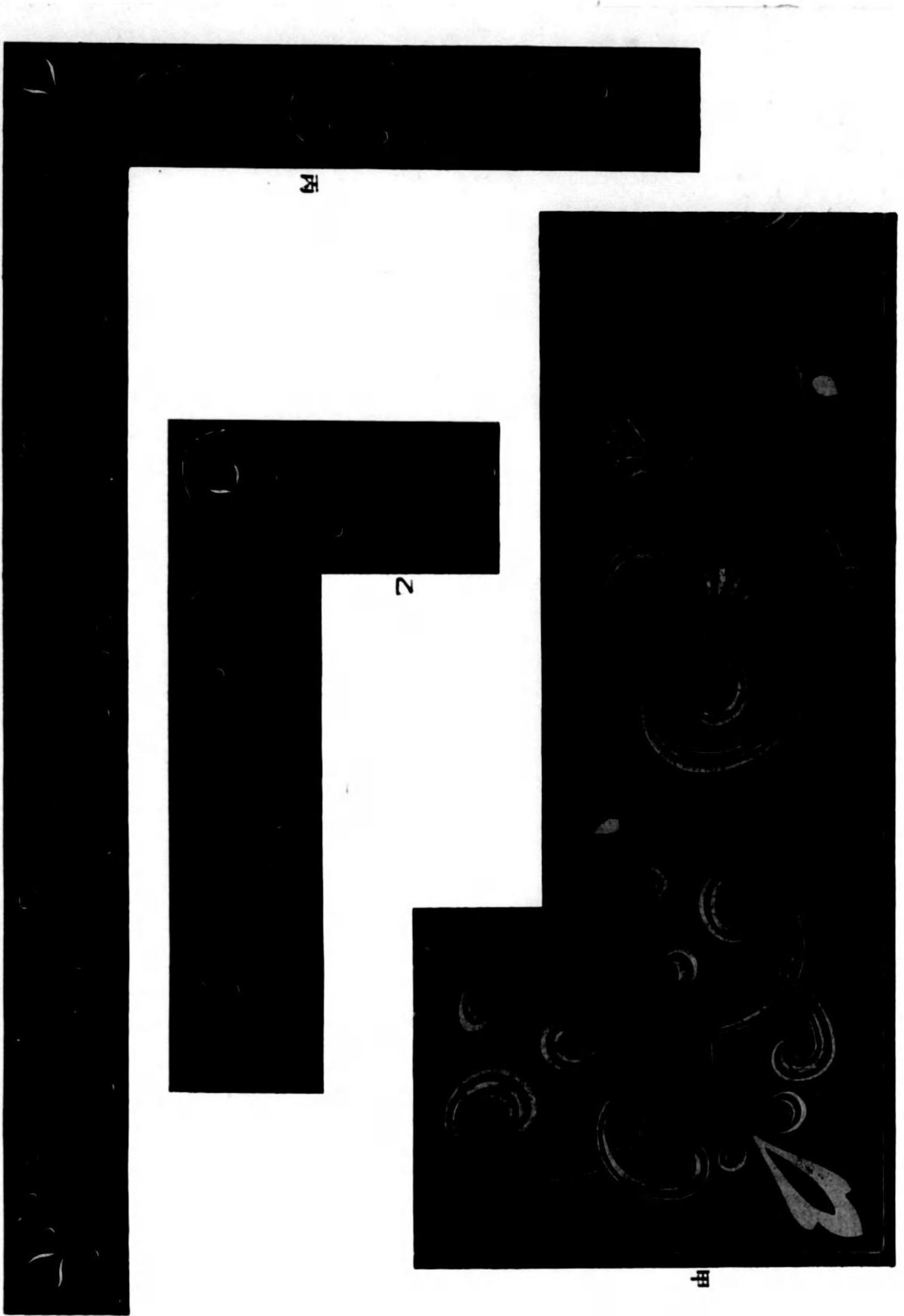


八尺竹漢物御



木 五 物 即





大盂鼎 甲 乙 丙 文作 丙 密 丙 乙 鼎 上 甲 段 中 空 基 八 卅 卅 子 何 鼎 五 季 全
 大 一 身 三 乙 丙 大 二 身 七 丙

商 周 青 銅 器 圖 說

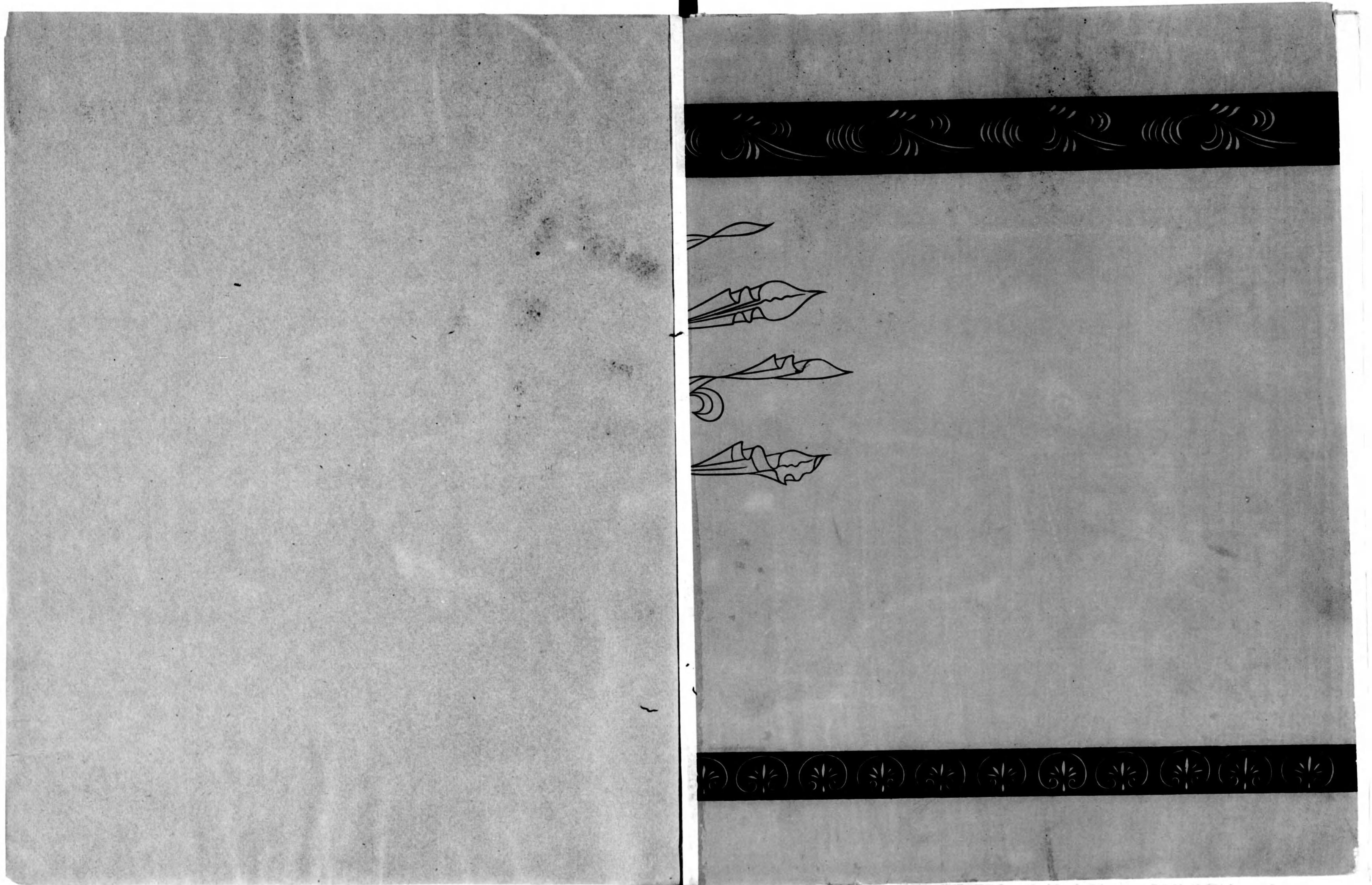
大正四年二月十七日印刷
大正四年二月二十日發行

大和國法隆寺藏版
東京美術學校編輯

發行者 東京市下谷區上根岸町百廿二番地
白石村治

印刷者 東京市下谷區中根岸町六十八番地
武田勝之助

發行所 東京市下谷區中根岸町六十八番地
墨彩堂



終